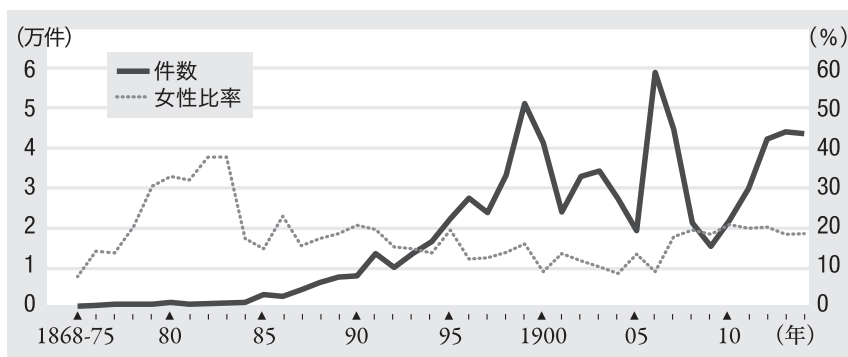


海外旅券発給数

解説 塩出 浩之



外務省通商局編『旅券下付数及移民統計』より作成

旅券とはもちろんパスポートのことである。今日の日本人が海外に渡航する際にも、「日本国旅券」の発給を受ける。教科書『歴史総合 近代から現代へ』（歴総707）p.73に掲げられている「海外旅券発給数」という図は、日本政府が1868(明治元)年から1914(大正3)年までに発給した旅券の件数、およびそのなかでの女性の比率について、外務省の統計(外務省通商局編『旅券下付数及移民統計』1921年、以下「外務省統計」と呼ぶ)をもとに、年ごとの推移を示したグラフである。

グラフをみると、まず旅券の件数は1884(明治17)年まではかなり少なく、ほぼ横ばいだが、1885(明治18)年から増加しはじめ、1890年代半ばから激増する。また1900(明治33)年頃からは、年によって激しく上下している。つぎに女性の比率は、1878(明治11)年から1883(明治16)年には30%強に上昇するが、その後はおおむね10~20%のあいだである。

こうしたグラフの特徴はどのように説明できるだろうか。また旅券件数の増減と女性比率の変化とのあいだには、どのような関係があるのだろうか。

なぜ旅券の発給件数は1884年まで少なかったのか

徳川幕府は1635(寛永12)年に日本人の海外渡航を禁じたが、開国後の1866(慶応2)年、イギリスなどの要請で解禁し、海外に渡航する者には旅券を発給した。1868年にはアメリカ人でハワイ総領事だったユージン＝ヴァン＝リードの斡旋によって、サトウキビ農場での3年間の契約労働のため、150名の日本人がハワイに渡った。しかし、過酷な労働条件などのため現地でトラブルが多発し、1870(明治3)年には40名が帰国した。

一方、1872(明治5)年には、横浜に寄港したペルーの商船マリア＝ルス号に乗せられていた中国人労働者への虐待が明らかになった(マリア＝ルス号事件)。マリア＝ルス号は、中国からペルーへの苦力貿易に従事していた。苦力貿易を批判していたイギリスなどの要請により、日本は中国人労働者を解放して中国に送還した。ただしこの過程でペルー側は、日本も国内では年季奉公という形で人身売買を認めていると批判した。日本は同年、芸娼妓など年季奉公人を解放し、人身売買を厳禁すると定めた(芸娼妓解放令)。

こうした経緯から、日本政府は当初、日本人労働者の海外渡航は人身売買に等しいと懸念して忌避した^❶。しかし日本・ハワイ両国の合意で1885年にはハワイへの出稼ぎ移民が始まり、以後、アメリカやカナダ、オーストラリアなどにも出稼ぎ移民が増加した。

また1880年代後半には海外移民だけでなく、北海道への移民も本格化している。これらに共通する背景は、1873(明治6)年から80(明治13)年にかけて実施された地租改正で、土地の所有権が個人に付与され、租税が金納化されたことである。これによって日本社会に商品経済が浸透し、また個々の家が経営のリスクを負うようになった^❷。こうしたなか、よりよい暮らしのために、稼ぎのよい仕事を求めて故郷を離れる人々が増えたのである。

なぜ旅券の発給件数は 1890年代半ばから激増するのか

旅券発給件数は1880年代後半から増加し、1890年代半ばから激増するが、外務省統計によれば、この時期に一貫して多かった行き先は朝鮮とハワイだった。

朝鮮への渡航者は1868年から75(明治8)年まで、および1877(明治10)年から83年まで首位を占め(どちらも2位は中国)、1885年から91(明治24)年にはハワイにつぐ2位、1892(明治25)年と93(明治26)年にはハワイ、アメリカにつぐ3位だった。近世以来の日朝関係を前提に、対馬出身者などが釜山に渡航したのに加え、1876(明治9)年に日朝修好条規が結ばれたあとは、新たな開港地である仁川や元山にも日本人の商業者や漁業者がさかんに渡航したのである。

朝鮮への渡航者は日本政府から様々な便宜を受けており、日清戦争がおきた1894(明治27)年以降は渡航が激増した。ただし、こうした便宜の一環で1900年には漁業者が旅券を免除され、1904(明

治37)年には韓国の保護国化とともにすべての朝鮮渡航者が旅券を免除されたため、統計上の旅券発給件数は減少した。1910(明治43)年には韓国が日本に併合され、日本の領土となったので、海外渡航という枠組みからはずれている。

ハワイへの移民は、当初は日本政府の監督下でおこなわれたが(官約移民)、1894年以降、政府が認可した移民会社によだねられて規模を拡大した(私約移民)。この時期、アメリカへの移民も増加したが、排日運動が激化したため、日本は1900年にアメリカ本土への労働者の渡航を禁止した。しかしハワイが1898(明治31)年にアメリカに併合されていたため、ハワイを経由してアメリカ本土に向かう「転航」がさかんになり、排日運動はおさまらなかった。

結局、1907(明治40)年から08(明治41)年にかけて結ばれた日米紳士協約で、日本はハワイを含むアメリカへの新規移民を禁止し、移民は家族の呼び寄せなどに限定された。1908年から14年までの旅券発給件数の首位はロシア(おもに漁業者)であり、アメリカ本土や中国、ハワイがそれに続く。この時期から、移民先はブラジルやペルー、フィリピンなどに移っていった。さらに1924(大正13)年には、ハワイを含むアメリカへの移民が全面的に禁止された。

なぜ早い時期には女性の比率が高かったのか

ここまでみたように、1885年以降に旅券発給件数の増加をもたらしたおもな要因は、労働者の海外渡航が本格化したことだった。そしてハワイやアメリカ本土など海外に出稼ぎした労働者は、故郷に家族を残した単身の男性であることが多かった。これが1885年以降、女性の比率が10～20%にとどまるようになるおもな理由である。

一方、旅券発給件数に占める女性の比率が高かった1878年から83年は、労働者の海外渡航がほとんどみられず、旅券発給件数自体もわずかだった。

この時期に海外に渡った女性は、以下にみるように、売春業に従事した人々が多かった。

外務省統計によれば、1878年から83年の旅券発給件数は朝鮮、中国(おもに上海)、ロシア(おもにウラジヴォストーク)の順に多い。とくに女性の比率が高かったのは中国とロシアであり、なかでも1882年と1883年の中国渡航者は半数以上が女性だった。

1881年の旅券発給記録によれば、この年に中国とロシアに渡った女性の平均年齢はそれぞれ22.7歳、21.6歳であり、この年齢の若さは独身女性が多かったことを示す。一方、朝鮮に渡った女性の平均年齢は26.5歳とやや高く、家族での渡航が多かったと思われる。また中国とロシアに渡った女性の渡航事由は、「縫針稼」や「洗濯稼」が多かった。裁縫や洗濯といった仕事が渡航目的とされているのだが、これは売春業の隠れ蓑だった可能性がある^①。

上海日本総領事館が1886(明治19)年に作成した調査報告によれば、1885年に上海に在留していた日本人は男が286名、女が380名と女性の方が多かった。女性のうち309名は「雇奴婢」(下女)であり、ほとんどが長崎県出身だった。調査報告は、こうした「雇奴婢」には実際に下女として働く女性よりも、売春業に従事する女性が多かったことを指摘している^②。実際、1880年代初めの上海には、日本人女性が働く売春宿が数多くあった。こうした売春宿は「東洋茶楼」と呼ばれ(中国語の「東洋」は日本を指す)、多くは日本人が経営していたが、中国人や西洋人が経営するものもあった^③。

またウラジヴォストークでも、1883年の時点で、日本人居留民でもっとも多かったのは売春業に従事する女性だった。なお、日本人居留民の大部分は長崎県出身者だった^④。

長崎県などから海外に渡航して売春業に従事した女性は、今日では「からゆきさん」として知られる。女性たちが「からゆきさん」になった理由とし

てしばしば指摘されるのは、故郷では現金を得られる仕事が少ないなかで、彼女たちが仲介業者に身売りすれば、両親など家族にまとまったお金を前貸ししてもらえたことである。また彼女たちは、海外の売春宿で働いて得た賃金を故郷の家族に送金することが多かった^⑤。

政府は芸娼妓解放令で人身売買を禁じたが、その後も売春業については、女性の自由意思によるとみなして認めた^⑥。そして「からゆきさん」も、「縫針稼」や「洗濯稼」、「雇奴婢」といった名目のもとで黙認した。出稼ぎ移民がさかんになってからも、満洲(中国東北部)や東南アジアを主として「からゆきさん」がみられた。ただし、彼女たちが旅券発給件数全体の中で占める割合は小さくなったのである。

① 木村健二『近代日本の移民と国家・地域社会』(御茶の水書房、2021年)第1章。

② 武田晴人『日本経済史』(有斐閣、2019年) p.55~63。

③ 宋連玉「旅券記録に見る女性人口移動——帝国日本から植民地朝鮮へ」(『世界の日本研究2002 日本統治下の朝鮮:研究の現状と課題』国際日本文化研究センター、2003年)。

④ 「十九、二十、両年調」(『海外在留本邦人職業別人口調査一件』第一巻、外務省記録7-1-5-4、外務省外交史料館所蔵、JACAR〈アジア歴史資料センター〉Ref.B13080299400)。

⑤ 陳祖恩(大里浩秋監訳)『上海に生きた日本人——幕末から敗戦まで』(大修館書店、2010年)第3章。

⑥ John J. Stephan, *The Russian Far East: A History* (Stanford: Stanford University Press, 1994), pp.76-79。

⑦ 山崎朋子『サンダカン八番娼館 新装版』(文春文庫、2008年)、倉橋正直『北のからゆきさん 新装版』(共栄書房、2000年)。

⑧ 横山百合子『江戸東京の明治維新』(岩波書店、2018年)第4章。
(しおで・ひろゆき/京都大学大学院文学研究科教授)